

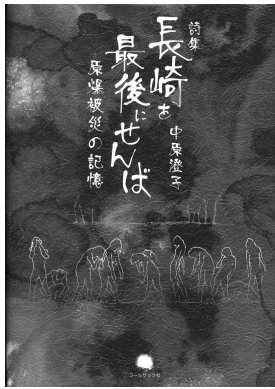
# 中原澄子『長崎を最後にせんば』

## 原爆被災の記憶

中野 和典

本書は、中原澄子による聞き書き集『天草へ帰った被爆者』（正編・二〇〇五年四月／統編、二〇〇五年一月、創言社）を散文詩集として新たに再創作したものである。なぜ、あえて聞き書きを散文詩に作り直すのか、という問いが先ず浮かぶことだろう。

と言うのも広島・長崎の被爆は、それぞれが一回性を持つ「歴史的事実」であるために、原爆についての語りの正統性は「爆心」を中心として階層化される傾向があるからだ。原爆との遭遇地点が「爆心」に近かつた者ほど「あのととき」のより正統な証言者であると見なされ、逆に遭遇地点が「爆心」から遠ざかるにつれて



原爆について証言する資格は薄れてゆく。そのような「爆心中心主義」の視点から見れば、被爆者からの聞き書きをあえて散文詩に作り直すのは、証言の持つ語りの一次性と直接性を損ない、「爆

心」から遠ざかることでしかないため、肯定的な評価にはつながりにくい。

しかし、本書にはそのような「爆心中心主義」の視点からは捉えられない美点がある。これは、聞き書きが持ついた魅力の一部をあえて捨てることによつて得られたものである。そもそも中原が、聞き書きを散文詩に作り直したのは、聞き書きを（もつと読み易い散文詩に直して多くの人々（被爆を知らない若い人々）にも読んでほしいと考えた）（二〇七頁）からであるという。聞き書きの散文詩化は、何より「読み易さ」を求めて行われたものなのである。その試みの効果が端的に読み取れる部分を、具体例として以下に二つ示す。

一つめは、被爆後、髪の毛が抜け落ちた姿を近所の子どもに揶揄されたと語る「荒木富士子さん」の例である。聞き書きでは次のように書かれている。

そして何年かしらん髪は生うわらうんでじゃつたでしよう。<sup>①</sup>この道ば通るたんびに、ゲンバク・ゲンバクつて男ん子の石ば投ぐつとです。わたしに。何ば被つとつたつちや、みんな知つてもうとつとですけん。髪あつとあるとなかつとのちがいで。ぞろぞろついでくつとですたい。私やこがんして生きとつとよりか死んだ方がまして泣きよつたつとです。ばつて妹がお姉さんが死んだら私はどがんしたらよかんないね、て言うつとです。興味本位でついで来よつたつとつしよ。<sup>②</sup>

（『天草へ帰った被爆者』正編二三頁）

順序が整理されないまま異なる次元のことが交互に語られるのが、聞き書きの文体の特徴の一つである。傍線を施した①く③の

部分は全て荒木さんを揶揄する子どもについての描写であるが、それらの合間に、荒木さんが被爆者であることを隠しようがなかったこと、子どもに揶揄されて辛かったこと、「死なないで欲しい」という妹からの切実な訴えがあったことが語られている。そのため内容が理解しづらく、傍線③の部分にいたっては、注意しなければ一瞬それが子どもについての描写であることすら分からない。これが散文詩では次のようになる。

人に見られんご(ごんたじ)つ／着(き)物(もの)の端(は)切れとか風呂敷(ふうよ)とかかぶつて裏道(うらみち)ば行きよつとに／どつ(どつ)からじゃい男(おとこ)ん子(こ)たちんぞろぞろ出てくつと／ゲンバク(げんぱく)ゲンバク(げんぱく)て笑いながら石(いし)ば投げつ(な)つと／／こ(こ)が(こ)んして生きとるよ(よ)か死(し)んだほう(ほう)がまして泣(な)きよつたつ／姉(あね)さんの死(し)なしたら私(わたし)はど(ど)がんして生(な)きたらよかんねて／妹(いもうと)も泣(な)くと

〔長崎を最後にせんば〕(二三頁)

傍線⑤・⑥の部分に傍線①・②・③の部分の内容が圧縮されていることが分かる。ここでは子どもとその他の要素を描き分けることによって情報が整理され、それぞれにまとまったイメージを持ちやすくなっている。

二つめは、長崎に原爆が落ちたときには何も見なかったと語る「窪田喜代喜さん」の例である。聞き書きでは次のように書かれている。

長崎に落ちたときは、牛深(うしふか)からは全然(ぜんぜん)見えとらん(らん)とです。こ(こ)ちからは長崎(ながさき)がどう(どう)のこう(こう)ので、じき(じき)には話(わ)しよらん(らん)やつ(つ)たつ(つ)です。野母(のぼ)半島(はんじま)のずう(ずう)つと来(き)るとるもん(もん)じゃつ(つ)け。牛深(うしふか)ん(ん)北(きた)ん方(かた)は山(やま)のある(ある)し、こ(こ)こは入(い)りこん(こん)どる(どる)でもん(もん)な。長崎(ながさき)の惨(あ)状(じやう)は行(い)って見(み)て、初(は)めて知(し)ったつ(つ)です。牛深(うしふか)は南(みなみ)を向(む)い

とるでもん(もん)な。富岡(とみおか)から下田(した)んあたり(あたり)ん西(にし)海岸(かいがん)からは、そ(そ)うり(り)や、火(ひ)の手(て)の煙(けむ)のて、見(み)えた(た)て、あと(あと)で聞(き)いた(た)です(す)ばつ(つ)て。

〔天草へ帰った被爆者〕(続編五六頁)

傍線を施した⑦く⑨の部分は全て牛深のことについて語られているが、それらの合間に長崎原爆のことを当初は話題にもしていないかったこと、そのことに野母半島の位置が関係していたこと、長崎の惨状を知ったのは後日、長崎市内に行ったときであったことが語られている。そのため長崎原爆の情報に触れるのが遅かったのは、牛深がどのような地理的条件にあったからなのか、ということは把握しづらい。これが散文詩では次のようになってい

八月(やうがつ)九(こ)日(にち) 新(しん)型(がた)爆(ばく)弾(だん)の長崎(ながさき)に落(お)ちたつ(つ)／牛深(うしふか)は天草(あまぐさ)下(した)島(じま)の南(みなみ)端(は) 海(うみ)の入(い)り組(く)んだ所(ところ)じゃつ(つ)けん 見(み)えん(ん)だつ(つ)た／ばつ(つ)て西(にし)海(かい)岸(がん)の高(たか)浜(はま)やら下(した)田(た)・富岡(とみおか)ん方(かた)からは／炎(えん)やらき(き)のこ雲(くも)の見(み)えた(た)つ

〔長崎を最後にせんば〕(九〇頁)

傍線⑩の部分に傍線⑦く⑨の部分の内容が若干の補足を加えられつつ圧縮されていることがわかる。それによって牛深の地理的条件も把握しやすいものになっている。

このように聞き書きから散文詩へと作り直される過程で、内容の精選や整序、さらに補足を行うことによって、聞き書きにはなかった「読み易さ」が散文詩では生まれている。このような例は本書の至る所で確認できる。

もちろん、「読み易さ」という価値が全てに優先するというわけではないし、本書が聞き書き集『天草へ帰った被爆者』に比べてあらゆる点で優れているというわけでもない。そもそも、何の前提も無しに聞き書きと散文詩の優劣を論じることなどできない

はずである。ただ、証言としての実在性<sup>リアリティ</sup>と語り口の多様性は『天草へ帰った被爆者』が優り、「読み易き」と文体の緊張感に『長崎を最後にせんば』の方が優っている、とそれぞれの美点を大まかに指摘できるだけである。そして「散文詩」の性格上、私の創作が加わり、「長崎」の惨状が中心となったことを御了承いただきたいと、切に願います（二〇七頁）という本書の末文には、中原が散文詩として作り直すことで失われる聞き書きの美点があることを確かに自覚していることが表れている。

それでもなお、なぜ中原は聞き書きに留まらず、その散文詩化を試みずにはいられなかったのか。それは中原自身の立ち位置と無関係ではあるまい。中原は「あのとき」『爆心』を遠望した者の一人であった。本書「序」によれば、当時、本渡高等女学校の四年生だった中原は、天草上<sup>かみまじがき</sup>島志柿から原爆を見た。

西の方角 遙かな地平にうす青い空を私は見た／凄惨なほどに透明な もうひとつの空／ひき込まれるように私は見つけた／この世のものとは思えない／うす青く透明な空／生まれて初めての 美しい空／「消えなければよい」と念じながら見つめた／「消えないでほしい」とまたたきの一瞬／空はいつもの空でしかなかった

これを原爆を見た体験と言って良いか否かは意見が分かれるところだろう。「爆心」近くで原爆に遭遇した者、例えば爆心地から約一・三キロの地点で被爆したという中沢啓治（『はだしのゲン』他）や一・四キロの地点で被爆したという林京子（『祭りの場』他）

などから見れば、中原は原爆を見たことにはならないのかも知れない。しかし、より『爆心』から遠い者、例えば戦争体験すら全くない世代の者から見れば（この世のものとは思えない）被爆時の空を目にした中原を原爆の目撃者の一人に加えたくなるかもしれない。

中原自身は、自らを「見た／見なかった」の境界に立たせている。本書結末近くの「承前」には次のような記述がある。

——もう 戦争の止んだぞう——／この「おらび」は私のものでもあった／「今夜から空襲におびえることもない 電燈がつけられる」と／「あの うす青く透明な空」の下の／苦しもうごめき 焼かれる人々のことを想い描くこともなく中原が目にした（美しい空）と、目にしなかった（焼かれる人々）との落差は強烈である。極めて美しい光景と惨たらしい光景とが隣接している、否、同一の出来事の二側面であるという事実——。例えそれが実感であったとしても、原爆をただ（美しい空）としてだけ記憶していて良いのだろうか、他の人々は原爆に何を見たのだろうか、といった問いに突き動かされて中原は聞き書きを始めたのではなかったか。そうして作り上げた聞き書きをさらに散文詩として語り直すことよって生み出された本書は、「爆心中心主義」という思考を相対化する試みの一つとしても評価できるのである。

（コールサク社 二〇〇八年八月 二〇七頁 二二〇〇円）